



「ファイト」 中島みゆき/吉田拓郎



青森市子どもの権利擁護委員 関谷 道夫



中島みゆきの大ファンで、レコードをすべて持っているという児童虐待を担当する同僚がいました。その時は、何が気に入っているのかも、中島みゆきの世界観も分かりませんでした。

- ◆ そんな時代もあったねと いつか話せる日がくるわ ～「時代」
- ◆ つくり笑いがうまくなりました ルージュひくたびにわかります ～「ルージュ」
- ◆ 柔らかな皮膚しかない理由は 人が人の傷みを聴くためだ ～「銀の龍の背に乗って」
- ◆ 逢うべき糸に出逢えることを 人は仕合わせと呼びます ～「糸」
- ◆ 手離してならぬ筈 (はず) の何かを 間違えるな ～「慕情」

気を付けて耳を傾けていると、中島みゆきの歌詞には、胸を時めかすフレーズが散りばめられています。なんとも切ない、胸の奥に突き刺さる、繊細かつ鋭角の歌詞がいくつも登場します。

私 本当は目撃したんです 昨日電車の駅 階段で
ころがり落ちた子供と つきとばした女のうす笑い
私 驚いてしまって 助けもせず叫びもしなかった
ただ恐くて逃げました 私の敵は私です

暗い水の流りに打たれながら 魚たちのぼってゆく
光ってるのは傷ついてはがれかけた鱗が揺れるから
いっそ水の流りに身を任せ 流れ落ちてしまえば楽なのにな
やせこけて そんなにやせこけて魚たちのぼってゆく

「ファイト」は、劇励する時や声援を送る時によく使います。「頑張れ」「応援してる」「共に頑張ろう」という意味があります。もう一つ、ファイトには「闘え」「戦意」「戦闘」と言う強い意味があります。

誰でも、生きていれば闘いから逃れることはできません。例えば、歌詞のように「あたし中卒やからね」と語る学歴偏重の社会、「ガキのくせに」と頬を打つ横暴な大人、「あたし男だったらよかったわ」と呟いた性差別など、世の中は、そうした承服できない理不尽で溢れています。順位の示される試験結果、入試や就職試験、資格試験、スポーツ競技、日常の対人関係においても、大なり小なりに闘いはあります。教室内では、いじめ・排斥がそうでしょうし、自分が優位であることを示そうとするマウンティングや、目に見えないスクールカーストも存在します。常在戦場で、どこに地雷が潜んでいるか分かりません。しかし、本当の敵は、他者や社会とは限りません。闘う相手は外の他に内

にもあります。心の中の諦めや臆病や狡さと闘うことも少なくありません。まさに“私の敵は私です”

心理学に「闘争・逃走反応 (fight or flight response)」という専門用語があります。ストレス理論のひとつで、恐怖などを感じる危機的な状況に直面した時に、自身に逃げるか戦うかを迫る反応のこと。「戦うか逃げるか反応」とも言われます。簡単に言えば、動物が敵に襲われそうになったとき、敵と戦うかそれとも逃げるか、瞬時に身体を動かせるように身構えることです。

人間は、動物ほど単純ではありませんが、強烈な脅威状況や歯が立たない強敵に対し時には、「闘う」「逃げる」又は「すくむ」という選択を即座に判断することになるでしょう。自分の身を守るためです。

日本では、「逃げるな！闘え！」「逃げるのは卑怯だ」「敵に背中を見せるな」と教えられてきました。これは強者の論理です。動物でも、相手が自分よりも大きく、強そうであれば、闘う前に逃げます。深手を負うようなことはしません。人間であれば、もっと情報処理能力はありますから、相手を探って、生き延びるために周りに「助けてくれ」と支援を求めることも、何とかして必死に逃げることもできます。援助希求行為や逃走行為を軟弱な行動だと思ふ必要はまったくありません。もともと、理不尽なのは相手の方なのです。生存欲求は、人間の最も基本的な欲求なのです。

つま恋の吉田拓郎のコンサートに、白いシャツを着た中島みゆきが出演したのを覚えています。一曲だけ唄って、手を振って去っていきました。その歌が「永遠の嘘をついてくれ」です。“君よ 永遠の嘘をついてくれ いつまでもたねあかしをしないでくれ”と唄っていました。拓郎に向かって、「嘘でもいいから、死ぬまで、あんたらしい夢物語を語りなさい！」とメッセージを送っていた気がしました。

中島みゆきは、心優しき人、傷付いたもの、挫折したもの、心痛めた人に対して、優しく手を差し伸べますが、一方で、「傷ついても、落ち込んでも、さらに闘え」とますます鼓舞する印象があります。決して優しいだけでありません。

「子どもを返せ」と迫る虐待親は、執拗な電話と面会要求、脅かしなどの警察沙汰を繰り返し、さらに自傷他害も見られるようになって、リセットできない結末で終わりました。中島みゆきを聴いていた同僚は、次第に、福祉の現場から遠ざかっていきました。心優しき対人援助職の「感情疲弊」「二次受傷」「トラウマ」を見たように思います。どうしても自分の幸せを切り売りする商売です。忘却には十分な時間が過ぎましたが、中島みゆきの歌が聞こえてくると、この同僚の姿を思い出します。きっと「そんな時代もあったよね」と微笑むでしょう。

最後に、私も、子ども達と自分自身に向かって「ファイト」と叫んで終わりにします。

ファイト！ 闘う君の唄を
闘わない奴等が笑うだろう
ファイト！ 冷たい水の中を
ふるえながらのぼってゆけ

